

ムガル帝国からインド帝国へ

今回学ぶこと

16世紀前半、インドを支配したムガル帝国は、軍事財政制度を柱に統治と支配を広げていった。しかし、18世紀初めのアウラングゼーブ帝の死後、イギリス東インド会社が次第に支配を拡大した。そして、19世紀中頃のインド大反乱を経て、ついにインドはイギリスによって直接支配されるインド帝国となった。今回は、このムガル帝国の統治と崩壊、イギリス支配の拡大とインド帝国の成立過程を学ぶとともに、イギリスの植民地支配の世界的な拡大によって緊密化するグローバル・エコノミーの中で、インドから世界各地に出て行ったインド人移民の動きの特徴を見る。

調べておこう・覚えておこう

- 18世紀までの世界で、帝国と呼ばれる国家がどこにどのように存在していたか調べ、それらの帝国がどのようなシステムで統治したのかを調べてみよう。
- イギリスが世界各地に植民地を獲得していった年と、それらの植民地が独立した年を調べ、イギリスの植民地支配の広がりや消滅の過程を見てみよう。
- イギリス植民地支配の下で、インドの鉄道路線がどのように広がり、それぞれの路線で何が運ばれたのか調べてみよう。

帝国を支えた軍事財政システム

ムガル帝国は、中央アジアから進出したイスラーム国家であり、少数派として多数派のヒンドゥー勢力を支配しなければならなかった。その際に採用したのは、官位に応じて軍馬数を維持することを定めたマンサブダール制と、担当する統治地域からの税収入を給与として与える給与地制とも呼ばれるジャーギール制という2つの制度を組み合わせた軍事財政制度であった。これにより、帝国は中央での軍事・財政負担なく、統治を行う体制を築いた。

崩壊の要因

圧倒的多数のヒンドゥー教徒が生きるインドに少数派のムスリムとして進出し支配を行ったムガル帝国は、第3代皇帝アクバルの時代に、異教徒への人頭税であるジズヤを廃止し、融和に

努めた。しかし、第6代皇帝アウラングゼーブは、ジズヤを復活するなど宗教色の強い統治を進めて反発を買った。また、支配領域が拡大するにつれて新たな給与地が消滅したことから、次第に軍事財政システムも維持できなくなっていった。

こうしたなかで、ムガル支配に対する反発が強まり、各地で続々と地方勢力が反乱を起こすことになり、それらの制圧に奔走したアウラングゼーブ帝が18世紀初めに死ぬと、帝国は一気に崩壊に向かい、名目だけの存在となってしまった。

一方、ムガル帝国の統治の弱体化と反比例して、各地の地方勢力が自身の支配領域の拡大を目指して激しく抗争したが、イギリスやフランスの東インド会社は、これらの抗争するインド人勢力に軍事的・財政的にそれぞれ肩入れした。イギリスやフランスの東インド会社は、軍事・財政援助と引き換えに徴税権を獲得するなど戦乱状況を巧みに利用して支配を拡大したが、最終的にはフランスを圧倒したイギリス東インド会社がインド亜大陸の全域を実質的に支配することに成功した。

ムガル皇帝は名目のみの存在として存続していたが、19世紀中頃に生じたインド大反乱で担ぎ出されたことから、大反乱が制圧されると廃位され、名目的にもムガル帝国は消滅することになった。大反乱後、東インド会社に代わって、イギリス国王が皇帝を兼ねるインド帝国が成立し、インドはイギリス本国政府によって直接統治されることになった。

イギリス植民地支配の特色

イギリスは植民地支配の下で地税を中心とした莫大な税収入を確保した。また、確実な利潤を確保できる投資としてインド各地に鉄道を建設したが、こうした鉄道をはじめとするインフラの整備は、インドをイギリス産業の原料供給地・製品輸出地へと変えていくためのものであり、結果的にイギリスに大きな利益をもたらす役割を果たした。また、インドで軍人や官吏として従事し帰国したイギリス人への年金支払いなども、インドでの財政収入から負担されるなど、植民地支配によってインドの人々は大きな財政負担を負うことになった。